

2009年6月1日

## J&J、腎動脈狭窄症治療のための医療機器として腎動脈専用ステント発売

ジョンソン・エンド・ジョンソン メディカルカンパニーは、腎動脈狭窄症に対する治療法の一つである「腎動脈ステント留置術」に使用する腎動脈専用ステント「PALMAZ Genesis(パルマッツ ジェネシス)」を6月1日から発売した。同日には、同製品の発表会および日本の腎動脈狭窄症の現状などについて小倉記念病院 診療部長 循環器科の横井宏佳先生が特別講演を行った。

「頸動脈などに動脈硬化が起こりやすいことは、多くの人に認知されてきているが、腎動脈も動脈硬化が起こりやすいということはあまり知られていないのではないかと横井先生は話す。「腎動脈狭窄症は、主に腎臓の血管に動脈硬化が起こることで、高血圧になったり、腎臓の機能を悪化させる原因となる病気。透析治療を必要とする腎不全の患者は年々増加傾向にあり、このうちの10～15%に腎動脈狭窄症が認められた」と、腎動脈狭窄症の患者が増えていることを指摘。「腎動脈狭窄症は、脳梗塞や心筋梗塞といった命にかかわる血管の病気を併発する可能性が高まるため、早期に発見し迅速な対応を行っていくことが必要」と警告する。

「腎動脈狭窄症は、狭心症や心筋梗塞などに比べ、初期の段階では、特徴的な症状がないため、自分で気付くのが難しい病気。そこで、画像診断検査を受けることをおすすめする。その中でも超音波(エコー)検査は、シンプルで、時間もかからず、検査費用もそれほど必要ないので、高血圧や糖尿病、慢性腎臓病(CKD)の人は一度検査してみたい」と横井先生はいう。

「検査の結果、腎動脈狭窄症でも、血管造影で70%以上の狭窄もしくは、50%以上70%未満の狭窄で収縮期圧交差20mmHg以下か、腎ドプラーでのpeak systolic velocity 180～200cm/sec以上となった場合以外は、内科的治療になる」とのこと。「腎動脈ステント留置術が必要と判断した場合は、足の付け根や腕から、狭くなった腎臓の血管付近までガイドングカテーテルを挿入し、ガイドワイヤーを軸にバルーン(風船)にステント(金属製の網の目状の筒)をかぶせたカテーテルを病変部

まで送り込む。バルーンをふくらませて、血管を内側から押し上げ、ステントを血管壁に圧着させて、血液を流れやすくするという手術になる」と説明する。

しかし、横井先生は「これまでは、硬くて太い『パルマッツ ステント』というステントしかなかった。『パルマッツ ステント』では、大動脈壁の損傷や解離、腎動脈閉塞など合併症リスクも高かった」と、腎動脈ステント留置術はリスクをとまなう手術であったという。「今回発売となった『パルマッツ ジェネシス』は、1.98mm の小径ガイドングカテーテルとの併用が可能となり、病変部へのアクセスが容易になった。また、独自のステントデザインで柔軟性も向上している。海外では、サイズダウンによって、合併症発症も低減したという報告もある」と、「パルマッツ ジェネシス」が腎動脈ステント留置術を根本から変える画期的な製品であると述べていた。

横井先生は最後に、「腎動脈狭窄症は自覚症状が出にくい疾患。患者自身が血圧を把握することで早期発見・治療が可能な病気のため、疾患の認知を高めていく必要がある」と訴えた。また、ジョンソン・エンド・ジョンソン メディカルカンパニー コーディス エンドバスキュラーシステムズ ジャパンのマーケティング部 桜井恵子ディレクターは「腎動脈専用ステント『パルマッツ ジェネシス』の発売を機に、腎動脈狭窄症治療の安全な手技の普及および疾患啓発を通じ、患者のQOL(Quality of Life)の向上を図っていく」と腎動脈狭窄症の認知拡大をサポートしていく考えを示した。

以上